目次

はじめに　大貫智子 ―― 9

第1章　冷たい外交関係の時期と日韓間の大衆文化交流 ―― 14

1　国境を越える大衆文化と韓流（小針）
東アジアにおける大衆文化の波及
文化・情報の流れを決める3要因と韓流
大衆文化の国境を越えた流通を規定する要因
韓国で規制されていた日本大衆文化の流入と「日本隠し」
90年代からジレンマを感じた韓国の日本大衆文化ファン
東野圭吾、奥田英朗、江國香織……韓国で吸引力がある日本小説

2　コロナ禍で見た韓流ブームと日本での特異な現象（小針）

「推し」という言葉とＢＴＳに「沼る」その影響
失敗と過ちを認めるＢＴＳへの評価
人間の安全保障で積極的に発言するＢＴＳ
「渡韓ごっこ」をする女子高生
韓流ファンの元祖・中高年女性と社会への「主体性」

第2章　若者の「違和感」と日韓関係

1　文化と政治をめぐる日本の大学生の葛藤（小針）

韓国は「令和の流行の発信地」、日本は「紙」のイメージ
政治と文化を切り離せない葛藤
「政治の韓国」＝朴槿恵と「文化の韓国」＝ＢＴＳの著しい差
韓国の「反日」と日本の「嫌韓」への嫌気
一昔前の世代との違いと共通点
「雪解けムード」で日本社会の空気に変化？
韓流は韓国政府の主導で人為的に作られた？

2　韓国文化好きが増えれば歴史問題はなくなるのか（大貫）
韓国で広がる「日韓の政治的関係も自然に改善する」との楽観論
「K-POP好きこそ日韓関係に向き合っている」
歴史問題解決を両国学生が模索
現実を踏まえたアプローチに期待感
男性の参加率の低さは気がかり

第3章　「政治の韓国」の中の日韓文化接触

1　消えた「NO JAPAN」と韓国の若者（大貫）
不買運動参加も訪日客も20代が最多
公正・公平を重視、「不当」は容認せず
幼少期から日本文化に親しみ
「韓日は対等」――グローバルな視点の中で見つめる日本
韓国人も指摘する歴史教育の影響
『82年生まれ、キム・ジヨン』をめぐる男女対立

2 韓国社会の分断と「親日フレーム」（小針）
旭日旗をめぐる「騒動」
「鬼滅の刃」をめぐる文化コンテンツ修正
ＢＴＳと秋元康氏とのコラボを撤回させた韓国ファン
「ネロナムブル」と「陣営論理」
「韓流好きの日本人が多いから大丈夫」という楽観論と「負のスパイラル」

第４章 外交の現場から見た日韓関係の「復元」――――

1 時の政権への忖度と地方自治体交流（小針）
政治・外交対立があると交流中止をする韓国側
「復元力」を見せた自治体交流

2 永田町のムード変遷と決定的だった尹大統領の本気度（大貫）
永田町で少数派だった政権交代への期待論
じわり高まった韓国新政権への期待
変化の芽が見え隠れした２０２１年

少しずつ解けた韓国への不信感
「復元」の象徴――12年ぶりの韓国大統領訪日
解決金支払いの発表が岸田首相の早期訪韓を決断させる
3 「陰の主役」中国の存在（大貫）
クアッド参加意思、インド太平洋戦略策定……韓国の対中政策の変化
韓国の対中感情の急激な悪化

第5章 文化か外交か――

1 文化交流の活性化には外交関係の安定化を（大貫・小針）
政権交代しても揺らがない関係構築に向けて
1位から1％へ転落した韓国への修学旅行は回復するか
外交関係に左右される紅白歌合戦のK-POP組出場数
2 それでも文化交流・人的交流は重要だ（小針・大貫）
文化接触では相手国への政治・外交面でのシンパシーは生まれない

無視できない日韓文化「共感」の時代
過小評価してはいけない人的交流の効果と若年層への期待
民間交流が新たな未来を拓く

おわりに　小針 進 ―― 245

主要参考文献一覧 ―― 250

目次・図版作成／MOTHER

＊本文中に登場する人物の肩書・年齢、組織名等は、基本的に事象の発生当時、または取材時のものである。原則として韓国人の氏名は漢字表記としたが、漢字が不明の人や日本では漢字以外の表記での活動を主としている芸能人等の場合はカタカナで表記した。

はじめに

大貫智子

ここは東京なのか、ソウルなのか。大写しの韓国人男性俳優が微笑(ほほえ)み、その右横に日本語訳のないハングル表記だけのメッセージが記されている。「종현아 일본 촬영 고생했어」（「ジョンヒョプ、日本での撮影お疲れ様」の意味）。２０２４年3月下旬、東京メトロ千代田線赤坂駅の構内でこの横長のポスターを目にした時、一瞬戸惑いを覚えた。

ポスターは、２０２４年1～3月にＴＢＳテレビで放送されたドラマ「Eye Love You」で主役を務めたチェ・ジョンヒョプさんの写真4枚が並べられたものだった。ドラマは、チェ・ジョンヒョプさん演じる韓国人留学生、ユン・テオと二階堂ふみさん扮(ふん)する本宮侑(もとみやゆ)里(り)（主人公の日本人女性）の恋愛をコミカルに描いたものだ。日本では、ユン・テオの細やかな気遣いや韓国料理がふんだんに登場する場面などが人気を博した。こうした日本国内の評判が韓国でも話題となり、知人の韓国人男性たちから「ユン・テオのストレートな愛

情表現は現実離れしていて気恥ずかしい」という声を何度も耳にした。

筆者（大貫）が驚いたのは、ユン・テオの心の中のセリフの一部が韓国語のまま放送され、日本語の字幕が付かなかったことだった。恋人の日本人女性は韓国語を一切解さず、ユン・テオの心情が気になって仕方がない。それは韓国に関心を持つ日本の視聴者も同様だったようだ。ある韓国紙の東京特派員は「毎週、番組放送後にインターネットの検索サイトを見てみると、ユン・テオのセリフの日本語の意味を調べる言葉が並んでいた」と教えてくれた。最終回のエンディングで、日本人俳優やスタッフの名前すべてにハングルが併記されていたのも目を引いた。韓国文化の広がりはここまで深化したのかと実感した。

日本で韓国文化が爆発的な人気を得るきっかけとなったのは、ＮＨＫが２００３年にＢＳ（衛星放送）で、２００４年に総合テレビ（地上波）で、それぞれ放映したドラマ「冬のソナタ」であり、すでに20年が過ぎた。韓国文化ブームは今に始まったことではない。

新しい動きとして筆者が注目しているのは、小中学生の頃からＫ－ＰＯＰや韓国コスメ、ファッションなどに親しみを持つ若者が増えていることだ。韓国は「おしゃれで素敵な国」と憧れを抱く子どもも少なくない。韓国人から「なぜそんなに人気があるのか、理解し難い」と不思議がられることもある。

「日本の高校生や大学生の間で、韓国コスメやファッションが大人気らしい」という話を最初に聞いたのは、毎日新聞でソウル特派員を務めていた２０１７年末のことだった。一時帰国した同僚が韓国特集の雑誌を目にしたと言いながら、半信半疑の様子で語っていたことを今もよく覚えている。筆者自身も信じ難かったためだ。

筆者は２０１３年４月～２０１８年３月、ソウルに駐在しており、この時期の日本国内の流行には疎かった。しかも５年間の在任中、政治的に日韓関係が良好だったことはほぼなく、韓国に滞在していたことが知られると子どもが日本の学校でいじめに遭うのではないかと心配する保護者もいたほどだった。

間もなく東京に帰任すると、想像以上に韓国文化が日本で浸透していることを肌で感じるようになる。特に若い女性たちに絶大な支持があり、大学で韓国語を学ぶ女子学生が急増していることを知った。現在高校１年の長男の周囲を見渡してみると、小学校卒業を機にスマートフォンを持つようになり、Ｋ－ＰＯＰアイドルの動画に触れて韓国に関心を抱いたという子どもがたくさんいた。それが語学学習へつながっていく構図がうかがえた。

もはや韓流について第何次ブームと冠することがないほど韓国文化は日本の日常生活に根づいた。近所のスーパーでは韓国餅やビビンパの素、コチュジャンなど大概の韓国食材

を売っており、家庭の食卓に韓国料理が並ぶ。駅構内の雑貨店でハングル表記の韓国コスメが簡単に手に入る時代だ。子どもの中学卒業の記念にと家族でソウルへ旅行したり、子どもから韓国に行きたいとせがまれたりしている友人は多い。

１９７５年（昭和50年）生まれの筆者の世代は、幼い頃、外国と言えば米国しか知らなかった人が大半で、筆者もそのひとりだった。今、幼少期から韓国という隣国を身近に感じて育つ日本人が増えていることは、日韓関係に携わる記者として素直に嬉(うれ)しく思う。

では、こうした現象は政治的な日韓関係にどのような影響を与えるのだろうか。これが本書の問題意識である。

韓国文化を好む若者たちは日韓関係にどのように向き合っているのか。このような若者たちの存在は、両国の外交関係にもプラスの影響を与えると言えるか。日韓間の最大の懸案である歴史問題の解決にも寄与するのだろうか。この問いに答えを見出(みいだ)したいと、学生たちへのインタビューを重ねていたところ、長年にわたって日韓の文化と政治の関係について研究されてきた小針進・静岡県立大学教授から共著の提案をいただいた。

ソウル駐在中から韓国の20代の対日観に関心があったこともあり、特派員任期を終えた後も、渡韓して取材を続けた。日韓双方から眺めることで、全体像が浮き彫りになるので

はないかと考えたためだ。

一連の取材をした２０１８～２４年の６年間で、日韓関係は劇的に変化した。２０１９年は徴用工問題を発端に「１９６５年の国交正常化後で最悪」と言われるほど関係が悪化した。新型コロナウイルス禍によって、政府間だけでなく民間の直接交流が途絶えていた時期も、相互不信は強かった。この頃、取材した日本人学生たちは、文化と政治のはざまで揺れ動いていた。詳細は第２章で、日頃学生と接している小針氏が記している。

第４章で詳述するが、２０２２年５月に韓国で尹錫悦（ユンソンニョル）氏が大統領に就任すると、次第に関係は改善に向かう。コロナ禍明けも相まって民間交流は再び活発になり、日韓両国の学生が歴史問題解決に取り組む席に参加する機会も得た。悩みながらも真摯に取り組む若者たちには感銘を受けることが少なくなかった。

筆者は２０２４年３月、毎日新聞から韓国紙・中央日報の東京特派員に転職した。韓国メディアが日本人記者を特派員として採用するのは初めてで、冷ややかな見方もあるのではないかと覚悟していた。ところが、日韓の友人、知人の受け止め方は予想よりはるかに好意的で、時代の変化を改めて感じている。本書を通じて、日韓関係の未来像についてともに考えていただければ幸いである。